

## レース委員長のレースレポート

松島ヨットハーバー運営委員会夏の恒例行事となったオープンヨットレースは、メンバーの親睦を図ることを主たる目的として 2022 年から開催され、今年で 4 回目を迎えた。今年は 8 月 3 日(日)、松島ヨットハーバーを拠点に、例年どおり松島湾内で開催された。

委員会の加盟クラブであるレーザー仙台フリート、仙台一高ヨット部、塩釜高校ヨット部、今年から仲間に加わった東北大学学友会ヨット部、そして閑上から仙台二高ヨット部が特別参加し、4 艇種 20 艇 27 名の選手がエントリーして、快晴・猛暑のなか熱戦が繰り広げられた。

レースコースはソーセージ、上下 2 周のコースだ。第 1 レースは北東の風 3 ノット以下、微風での展開となった。10 時 10 分スタートするも風はさらに弱まり、レース艇はなかなか第 1 マークに到達できない。本部船は、このままレースを継続するか中止にするか判断を迫られたが、第 2 レグでコース短縮することを決定、マークボート黎明に S 旗を掲揚し、第 2 マークでフィニッシュをとった。結果は、レーザー仙台フリート ILCA7 級の耿こう殿程でんてい選手が、わずかな風も見逃さない丁寧な走りを見せトップでフィニッシュした。ILCA7 や ILCA6 級の選手が上位で続いた。

ところで、松島オープンヨットレースのように、性能の異なる複数の艇種で競われるレースでは、レース結果の公平性を担保するため、艇の性能差

を補正する必要がある。ディングーのレースでは、「ヤードスティックナンバー」(以下 YSN と記す。)と呼ばれる補正值が広く用いられている。この数字によりスタートからフィニッシュまでに要した時間を修正している。修正時間が短い艇がより上位となる。YSN は艇の性能を数値化したもので、数値が小さいほどスピードが速く、大きいほど遅い。今回出場した艇の YSN は次のとおりである。

470 級 = 83、420 級 = 96、ILCA7 級 = 96、ILCA6 級 = 102

したがって、異なる艇種が混在するレースでは、先にフィニッシュしたとしてもその艇が上位になるとは限らない。参考まで修正時間の計算式は次のとおり。

修正時間(秒) = (スタート時刻 - フィニッシュ時刻) / YSN × 100

修正時間と YSN は反比例の関係にあり、YSN が大きければ修正時間は短く、YSN が小さければ修正時間は長くなる。昭和の時代は、レース終了後、電卓を叩いて計算したものだが、今はパソコンの専用ソフトで簡単に修正時間を算出できるようになった。どうでもいいことだが . . . 。

話をレースに戻そう。引続き第 2 レースが 11 時 15 分にスタートした。風は一転して南東の風 12 ノット、絶好のコンディションとなった。各艇上りはフルハイク、フルトラップーズである。この風になるとセール面積の大きい 470 級が断然速い。ソーセージコースを 2 周して、東北大学チームがトップでフィニッシュした。続いて ILCA7 級レーザー仙台フリートの選手がアビームで次々とフィニッシュラインに滑り込んできた。420 級や ILCA6 級に乗る高校生は

今一つスピードを欠いた。ただ、前述のとおり先にフィニッシュした艇が上位になるとは限らない。東北大の 470 級は YSN が 83 と相対的に小さく、トップでフィニッシュしたにもかかわらず、レース後に算出した修正時間では第 2 レースは 13 位に留まった。スピードの速い艇は異種艇に圧倒的な差をつけなければなかなか上位には食い込めない。

時刻は 12 時過ぎ、予定していた 2 レースを終え、選手がぞくぞくとハーバーに戻ってきた。昼食は委員会が用意したほっともったの唐揚げ弁当だ。ルパン号のメンバーである伊藤洋子さんが作った汁物にも舌鼓を打った。洋子さんが作った料理は何でも美味しいのだ。

みんなが食事を摂っている間、私と遠藤芳純さんは会議室に籠ってレース結果の集計だ。手書きのフィニッシュ記録を見ながらのパソコン入力、老眼にはつらい作業だ。13 時 30 分集計作業終了、ようやく結果がまとまった。

13 時 40 分、閉会式と表彰式。志鎌実佳さんがレース結果を読み上げた。上位はレーザー仙台フリートの選手が独占した。第 1 位は ILCA7 級の耿 殿程選手、堂々の 3 連覇である。御年 83 歳の八木廣治選手はなんと 5 位入賞だ。レーザー級の全日本や世界選手権にも出場した往年の名選手は未だ健在、衰えを知らない。

表彰式では参加者全員に賞品や景品が授与された。決して潤沢ではない予算のなか、佐々木幸男委員長渾身の大盤振る舞いである。みんな大喜び。

松島ならではの微笑ましい光景だ。最後は全員で記念写真を撮って14時過ぎに無事散会となった。

結びに代えて、

レースコースの設定は、これまで風見コンパスとポケナビ、そして何よりレース委員長のスルドイ勘で進めてきたが、近年では、スマホの位置情報と通信アプリの組合せで簡単にできるようになり、他の水域ではこの方法が主流らしい。アナログ育ちの私には今一つ理解できないところだが、委員会の役員も高齢化が進んでいるので、このようなデジタル技術を活用して、レース運営の効率化を図っていきたいと考えている。このほかにも加盟クラブの皆さんのお知恵を拝借しながら改善を進めたいと思っているので、引続きご理解とご協力をお願いしたい。

(事業広報部 平山達也)

おまけ

青天に  
わが艇ふねの帆の  
真白なる  
風を吸い込み  
松島を跳とぶ